●１１月選評　　小島なお

・常田　瑛子（山口県）

賞状の鳳凰枠の金箔が
べたべた光り地中に潜る

他よりも特別に秀でていると賞された証明書。枠に縫い付けられたように向き合う二羽の鳳凰は、人の目に晒されなくなることで安寧を得られるといい。

・石村　まい（兵庫県）

ひとりっ子だから
庭じゅうとりのほね
抱きしめているようにさびしい

庭じゅうに埋めた骨を犬はいずれ忘れてしまうという。ひとりっ子の独占的な愛の寂しさは、永久に傍にいてくれる無数の友人を欲している。

・佐藤　知春（東京都）

棲みにくい水道都市の冬星座

都市の区画に張り巡らされた水道管。その緻密な設計の上に佇ち、頭上を見あげれば天体図通りの星座が配置されている。棲むことを脱して住んでいる人類。

・ほしはかせ（群馬県）

冬の野の光で優しい父を編む

野の一面に注がれるぴんと張りつめた、冷たい透明な糸で父親を編んでゆく。出来上がった父親は、今度こそ私に優しさという形の愛情を与えてくれるはずだ。

・野中　周太郎（福岡県）

サンダーバード
原材料を
読む時間

パッケージの裏側を眺める名前のない、些細なときのまの滞空時間。サンダーバードのドラマティックな速度や光のイメージとの目眩のするような対比。

・伊井　豊浩（千葉県）

山茶花を想ってドアに手をのばす

ドアの向こうに山茶花が咲いているのだろうか。ノブに伸ばす手はすでに寒々とした赤を夢見ている。頭の中の山茶花が零れるたびに扉はかすかに膨らむ。

・あわい　暮笛（大阪府）

御鍼師が
打ち抜いた哀しみ連れて
ダシダと北風 全部買います

ツボを突く鍼はずうんと深くへひびく。急所だらけの、だたひとつの肉体で母国や季節を生き抜いていかなければ。所有することで逃れる哀しみがある。

・川上　真央（東京都）

べーぐると言うとき
やぎとおそろいの
くちびるを陽に差し出している

べーぐるのべーのあたりにおそろいの感覚が出現する。のどかな草食のくちびるを日差しのなかに晒すとき、喉の奥に草汁がなつかしく匂う。

・中原ららら（神奈川県）

摺り足が底から砂を出すように
夜更けを削りのぼる階段

地面から出てくる悪魔を払い、清めるのが能の摺り足である。夜の底を足の裏で削り取ってゆく足取りは、現世の切り岸を歩むように階段は夜明けへつづく。

・白鳥　陽太（神奈川県）

祈りごと小さく握る寄生虫

祈るのは何かを頼みにする行為と言える。力を込めて握っていた手のひらを開くとき、自らの思いが他者を依り代として居場所を得ていることに気づく。